

## 「私の第一声④」

【注射が怖い！ 大嫌い！】

私は、あまり丈夫には生まれなかったようで、よく病気になりました。小児喘息でしたし、小さい頃に何度も高熱を出して、ゴム製の氷枕の上に頭を置いて寝かされていたことも、ぼんやりと覚えています。

医者にも何度も通っているのに、慣れているはずなのに、注射が大嫌い。昔は、いろいろな予防接種を学校でしていました。小学校低学年の時、実際に逃げ回り、担任と保健室の先生に抑えつけられて、注射されたことを憶えています。危ないし先生も嫌だったでしょうね。

とにかく怖かった。なのに、まわりの人が、それほど注射を怖がっていないのが不思議でした。「ぼくは王様」(寺村輝夫)という児童文学を読んだとき、主人公の王様が、「玉子が大好きで注射が大嫌い」というキャラクターで、「自分と同じだ！」とすごくうれしかったのを、憶えているくらいです。

私が中学生になった頃、母が「お兄ちゃん(私には妹が2人いるので母は私をこう呼ぶのです)が、注射を怖がるようになったきっかけ、教えてよか」と、エピソードを話してくれました。

3歳くらいのある日、いつものように私が高熱を出します。不思議なもので、子どもは、保護者が忙しい時とか、この時はやめて、と思うタイミングで熱を出します。その時も、熱が出た時間帯には病院に連れて行けなかったらしく、熱さましを飲ませて寝かせていたら、どんどん熱が上がり、夜中になった頃40度を超えてしまったのです。

仕方なく、地元の病院に連絡し、私を連れていきます。対応してくれたお医者さんは、白衣も乱雑に着て出てきて、猛烈に機嫌が悪かったそうです。ちょっと私の様子を診たら、すぐに看護師に指示を出し、出てきたのが、両親共に見たこともないほど太い注射器。えーっ！と思ったのですが、止めるわけにもいかない。異変を感じた私は、泣き叫びます。「うつぶせに寝かせて、お尻をだして！」医者の指示に、両親も看護師もすぐに対応します。私はベッドの上うつぶせに抑えつけられます。泣きじゃくりながら手足を振り回して暴れる私。抑えつける両親。注射器を構えて迫る白衣の医者。一層叫ぶ私のお尻に針

が刺さり、薬液が注入されたのでした。

「その日からお兄ちゃんは注射が怖く、白衣を見るだけで泣くようになったの。かわいそうに」母はそう言うと、にやりと笑ったのでした。

幼児期のインパクトの強い体験は、その人の人生に大きな影響を与えることがあると言われていています。でも、実は子どもにとって、毎日毎日インパクトの強い体験ばかりです。子どもがそれらの体験を重ね、喜んだり苦しんだりして自分の行動を選び、その結果を自分で引き受けていくうちに「何を、どう捉えて、どう行動するか」という、その人の基本的な行動原理が形作られていきます。この行動原理がその人の個性の一部になるのです。

大人もみんな、昔は子どもだったので、子どもの気持ちをわかっていると思いがちですが、体験が個性になっていく過程は、その時の心の状況なども大きく影響します。子どもを見守っている大人からみると、大きなできごとなのに思ったほど子どもが反応していないように見えたり、些細なことをやたら気にして意外だったりしますよね。子どもたちは、みんな一人ひとり、特別な体験を積み上げて自分の個性を作り上げていくのです。

中学生も、同じです。幼児期ほどではないですが、日々の体験を個性に変えて成長します。保護者のみなさんには、子どもたちの体験や感じていることを、否定せずに、「そうなんかー」と共有していただき、全く同じではないにしても、似た体験をしたことのある人生の先輩として、アドバイスをしてあげて欲しいです。もちろん、気持ちに寄り添いつつ、行動については「アカンことはアカン！」とご指導願います。

中学生の私も、母から幼少期の注射のエピソードを聞いて、自分の注射が嫌いな理由に納得がいき、これをきっかけに、不思議なくらい恐怖心が薄らぎました。もちろん、今でも先端恐怖症的な面は残っており(自分が書いているシャーペンの先を見るのがつらくなったりします)、そんなに単純にはいかないようですが(笑)。

【不定期コラムNo.15】へつづく

### 第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP